

series わたしの仕事 (1)JR東海

安富亮太

(H16/2004卒)



○はじめに ～自己紹介～

2000～2006年の間、物理工学科及び機械工学専攻に在籍し、卒業論文は故・島先生、修士論文は吉田先生に師事しました。大学院終了後、新卒として入社して以来、現在に至るまで東海旅客鉄道株式会社（JR東海）に籍を置いています。2014～2016年の間は、米国マサチューセッツ工科大学に留学し、これまで京大で学んだこととは全く畑違いの分野になりますが、Master of Science in Transportation という2つ目の修士の学位を得ることになりました。

この度、京大の学生時代に加え、留学に際してもお世話になった吉田先生より、京機短信を大先輩ばかりに任せてないで若い者からも書かんかい！という叱咤を頂き（もっとご丁寧な依頼でしたが）、投稿させて頂く運びとなりました。京機短信の主たる読者層であろう機械関係のエンジニア、研究者の方々に興味を持って頂くキャリアでは全くありませんが、学生時代からお世話になった京機会との繋がりは大事にしたいと思っていますので、こんな卒業生もいるんだということをご理解頂ければ望外の喜びです。

やや話は脱線しますが、京機会学生会SMILEが立ち上がってまもない2004年に、SMILE 2期で学生会の活動をしており、中部地区・関東地区への工場見学企画を始めたり、経営者として活躍をされていた大先輩方と交流する機会を設けたり、せっせと研究活動からの逃避に勤しんでおりました。今も当時の学生会同期で集まって酒を飲む機会がありますが、意外にも、もはや卒業後に入社した会社から転職をしている者の方が多くなっているのには驚きです。

○仕事 ～過去・現在・ちょっと先の未来～

既述の通り大学院修了後、鉄道会社に籍を置いており、社内のカテゴリーでは「運輸」というジャンルの仕事をしています。鉄道利用者の需要の想定や、車両・乗務員などの運行リソースの調整を通じて輸送計画を立てたり、運行オペレーションを担う乗務員、駅員、指令員などの教育を始めとする人的資源の管理、また

それら係員が使用するシステム・設備を構築したりするような仕事がメインです。就職前、鉄道の仕事にあまり興味はなく、新幹線はほぼ自動で動いているものだと思っていました（結果、入社して程無く自分が運転することになりましたが）。ただ、地元静岡の駅を高速で“通過”する新幹線を眺めながら、こりゃきつと凄い技術なんだろうと感じてはいました。大学院まで行っておきながら、設計者、研究者として仕事をしていく実感がいまいち持てなかった自分は、現在就職活動期間に関する論議で大学側から非難が出ている理由そのものの通り、かなり時間をかけて色々な企業を見て回りました。結果、やはり学んだ分野と異なる仕事に興味を持ちつつも、一方で、銀行のように既に金融・経済・法律等を専門に学んで入ってくる文系の者と同じフィールドで競うのもまっぴらごめんと感じ、理系の素養もそれなりに生かしながら色んな仕事が経験できる、という文句に誘惑され、現職を選んだという経緯です。

入社後は、車掌、運転士、駅員、指令員を合計2年ほど担当してから、10年ほどの間、概ね2年程度のスパンで運輸の仕事をしていくつかに担当してきました。輸送計画関係の仕事では、名古屋地区の在来線で当時まだ存在した旧国鉄の気動車100両ほどを、新型の気動車に置き換えるプロジェクトで、車両の仕様の検討（台車の設計など機械系っぽい仕事ではなく、運行ダイヤに関する加減速性能の要件やサービス機器などを決める）、必要両数の精査（鉄道車両は1両あたり数億円）などを担当し、鉄道の仕事はなかなか面白いと感じるようになりました。



途中大阪での2年間の勤務を挟み、名古屋に通算5年ほど勤務したため、留学からの帰国後は名古屋に家を買ってベースとすることと決めたものの、現在はというと東京での勤務で、東海道新幹線の運輸に関する色々な仕事をしています。昨年の漢字は「災」でしたが、9月・10月の台風では東海道新幹線で初めてとなる大規模な計画運休をしたり、新幹線の運行にも影響を与える様々な事象がありました。中でも、6月9日に発生したのぞみ265号車内殺傷事件に関する対応としては、事件発生後、車内での刃物などの脅威に対してお客様と乗務員の命を守るための

防護用品を検討し車内搭載したり、警察と連携して実践的な訓練を企画・実施したり、警乗警備をする警備員の大幅増員を進めるなど、様々な対策を急ピッチで行いました。駅での手荷物検査の難しさ、というのはご理解頂ける方とそうでない方がいると思いますが、一日約40万人が利用する輸送機関においては、部分的な導入ですら不可能であるのが実際のところですが、私にとっても、生涯忘れられない事件となりました。

当社では社員の半数以上が運輸関係の社員で、その殆どが駅員か乗務員として現場で働いています（どこの鉄道会社も似たようなものだと思います）。労働集約型産業の典型であるこの鉄道業においては、オペレーションを担うこれら係員を如何にマネジメントしていくかが大変重要であり、運転事故を起こさないための指導・教育や、国鉄が破綻する要因ともなった労務関係を適切に管理することが兼ねてより運輸の業務の中心でした。しかしながらこれも近年、急速に変わりつつあると感じます。新幹線の切符もネット予約が中心になり、駅の窓口で販売する割合は減少しています。乗務員の携帯ツールの進化もあって、今年3月には新幹線の車掌の基本数も3人から2人に減少しました。今後は自動運転、MaaS（Mobility as a Service）など、情報通信系の技術革新に対応し、如何に利用者に選んでもらえるサービスを構築するか、安全性・快適性を維持しながら自動化を進めていくかが、間違いなく私どもの使命となってきています。不思議なもので、大学卒業後、機械系から離れ、技術分野から自ら遠のいたにも関わらず、再び仕事において工学的要素が重要度を増してきました。

○さいごに ～留学のすすめ～

入社して7年目に、社内選考の結果、幸運にも社費留学のチャンスを得ました。その後、1年ほどかけて大学への出願、留学準備をするわけですが、仕事を通常通り継続しながらの、2人目の子供の面倒を見ながらの（こう言うとあなたは何もしなかったじゃないのと妻に怒られますが）、受験と準備はまさに地獄で、もはや当時を思い出したくもありません。TOEFL（iBT）だけでも12回ほど受けたと思います。出願した全て落選すれば折角の留学資格が喪失するという背水の陣で臨んだ結果、TOEFLは留学を志して初めて受験した41点から、大学出願時点では100点（ピタリ賞）まで何とか届き、何とか幾つかの大学に合格し、MITのMaster of Science in Transportation という2年の修士コースを選びました。

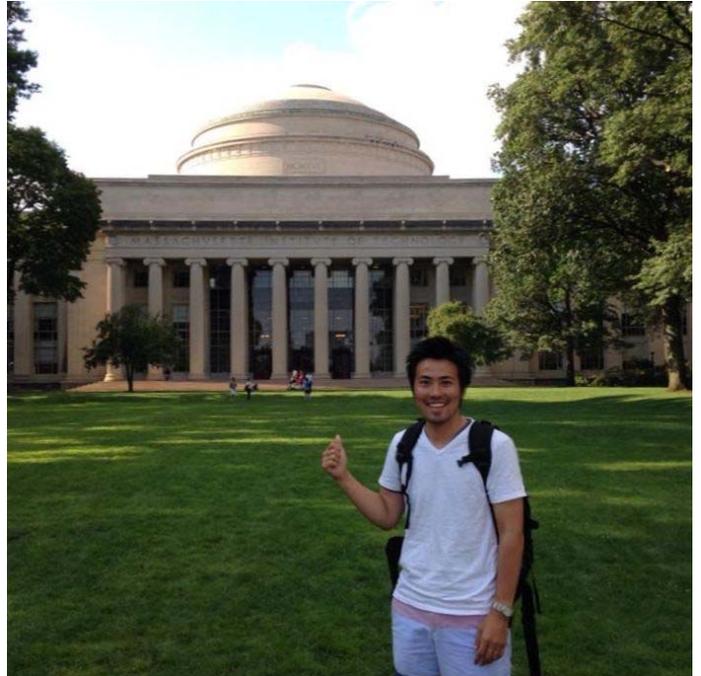


当コースは世界でも珍しい交通に特化した学際的プログラムで、交通経済・オペレーションリサーチなどのアカデミックな研究分野と、航空（管制、空港設計、レベニューマネジメント）、道路交通（信号制御、高速道路設計）、公共交通（運行計画策定、ビッグデータ処理）などの応用分野で実績のある専攻です。大体、上記記載の科目を一通り勉強し、200ページ弱の修士論文を執筆の上、卒業しました。コースの学生は47名、うち6割が留学生で、日本人は私一人でした。既に思いのほか長い記事になってしまったため、学業の中身については記載しませんが、読んで頂いた方の中には留学に興味を持ってくださる方もいると信じて、最後に異国でのコミュニケーションを通じて感じたことを幾つか述べたいと思います。

大学でのグループワークや、プレゼンなど、ビジネス的なコミュニケーションは、最後まで言葉の壁が消えることはないものの、ある程度からは気合の問題と達観するようになりました。2年、様々なプログラムで鍛えられても、ネイティブ同士の高速会話は理解できず、こちらの伝えたいことが言葉に詰まることはありますが、やらねば卒業できませんので腹くるしかなく、その辺りを腑に落としてからの方が、成績も良好になりました。日本語でもそうですが、コミュニケーションの是非を分けるのは、会話力よりも論点の明確さだとも改めて感じました。振り返ると、留学初期は引け目を感じて発言を控えることも多かったので、本格的な留学前に、短期の留学でこの諦めにも似た達観を味わっておけば、より時間

を有意義に使えたのではないかと感じます。※ちなみに、インド人と英語で話をしたことがある人は、インド訛りの英語が聞き取りにくいのを感じたことがあると思いますが、アメリカ人にとっては、インド人の英語の方が日本人の英語よりもまだ聞きやすいと言っていました。これはもうどうしようもありません。

一方で、ソーシャルなコミュニケーション（友人付き合い、人脈形成）では、言葉の壁の先にあるグローバルな教養の壁を痛切に感じました。話すスキルが無い悔しさでなく、話す内容が無い悔しさ、という感じです。留学をしてくる外国人学生は自国以外の知識にも関心が深く、日本のこと（歴史、テレビ番組、本など）もよく知っており、例えばある席で「山岡荘八の徳川家康を読んだけどとても良かったよ」と中



国のクラスメイトから言われましたが、悲しいかな私はそれを読んだことがないことに加え、何か中国人の書いた本を読んだこともないため、返す言葉がありませんでした。相手に対して話すネタが無い、自分がいかにつまらない人間であるかとショック受けることは多数ありました。これについては恐らく日本にいても同種の経験をできる場はあると思いますが、バックグラウンドの違う人間と有意義な情報交換するためには、アンテナと引き出しを増やす努力が必要だと実感しました。とてもいい経験だったと思います。

確か作家の塩野七生さんのエッセイだったと思いますが、海外で長く生活した者は99%愛国者になると書いてありました。高々2年いただけでも、これは間違いないだろうと実感します（中国人の友人は帰りたくないと言ったので、ほとんどでしたので、万国共通というわけではないかもしれませんが）。私は2年の間は帰国しなかったため、帰国後はコンビニのおにぎりにも胃が喜び、職場近くのとんかつ屋でヒレカツを食べたときには感動で涙が出ました。「祖国」という言葉は、自国しか生活したことがない者にとっては存在しない言葉だと思います。やってみないと分からない、海外生活はその最たるものです。学生の方、20・30代の方には、ぜひ積極的に留学することをおすすめします。